

学校だより



川口市立元郷中学校

〒332-0003 川口市東領家1-8-3

TEL 048-222-4143 FAX 048-225-3222

令和2年10月15日 第355号

<https://motogo-j-kawaguchi-saitama.edumap.jp>

いろいろな不自由

校長 高田 晶子

校内の金木犀の甘い香りが、秋の気配を感じさせてくれています。最近は季節を堪能する間もなく移り過ぎていくように思います。外気を室内に取り込み、深呼吸をして、ゆったりと時間を過ごしていきたいものです。

さて、コロナ禍の中で新しい生活様式をと言われ、今までとは違う観点を持って生活をするようになったせいか、「不自由な」という言葉を何度となく目にするようになりました。その中から、いくつか考えてみました。

まず1つ目は、「戦争を経験して生き残った世代の人間は、**戦争中の不自由さ**をありありと思い出す」という、僧侶の瀬戸内寂聴氏が掲載した記事についてです。

「人間の智慧（ちえ）とコロナの競争は、品を更（か）え質を更えても、繰り返しつつき、果てることはないのではないか。」と瀬戸内氏はまとめていました。

元郷中学校でも、9月に戦時中の学童疎開の話进行学习しました。現在、日高にお住いの大塚チエ子様より体験談をお寄せいただき、教頭先生の朗読により、全校生徒が学びました。生徒の感想から、「今の時代は幸せなんだ」「満足に食事もできず、夜も眠れなかったんだ」「自分だったら疎開の生活は我慢できない」「英語は使えない、紙はない、落ち着いて勉強ができないなんて」など、今の生活に置き換えて考えている生徒も多くいました。戦時中の話は、このコロナ禍に重ね合わせて考える良い機会になったのかもしれない。

2つ目に、「不自由 みんなの問題になった」という、コラムニストの伊是名夏子氏の記事です。「障害者は社会のお荷物だ」という意識が世の中にある限り不安をぬぐえません。旅行できない、受験できるのかといった**コロナによる不自由**は、障害のある人の日常です。『障害者なんだからできなくて当たり前』とされてきたことがみんなの問題となった。」

本当の不自由ってなんだろうか？考えさせられる、記事でした。

3つ目は、「学ぶチャンスは誰にでも」という記事を、ウェブ制作会社「仙折」社長佐藤仙務氏が掲載していました。「寝たきりで、左手の親指を1センチ動かせるだけの私が高等教育を受けられるようになったのは、テクノロジーの進化のお陰といえる。もっと社会全体で有効活用できれば多くの障がいがある人たちが、高等教育に挑戦できる。本来障がい者にも学ぶ権利があり、学ぶチャンスもあるのだから。1年前にオンラインの環境で経営学修士を取得し、仕事に就き、同じような障がいのある方を雇い、ささやかながら納税もしている。」

10年前には大学をあきらめていた時代。オンライン教育はもうそこまで来ているということだと感じています。皆さんは、いかがでしょうか。

シリーズ 「学校・家庭・地域とともに」①

ここ数年で、スマホ普及やオンラインアプリの増加・多様化にともない、中学・高校でのネットやスマホの使用をめぐる問題が深刻になっています。これは、元郷中学校でも大きな問題と捉えています。心身ともに健全な成長を願う大人の見守りは、とても大切です。

子どもたちを取り巻く環境で起こる問題点を取り上げ、共に考えていきたいと思えます。ぜひ、ご家庭や地域での話題にさせていただけたらと思います。

*本校のLINE（ライン）を使った事例から

- 1 LINE上で、AがBの悪口を言っているとCがBに伝え、BはAに正したところを否定した。Aは、デマを流したのは誰だと言き込み、お互いを疑うことになった。
- 2 「嫌い」と直接言わず、LINEで伝えようとしてトラブルになる。
- 3 LINE上で、部活の仲間を省く。
- 4 LINE上で、「キモイ」と友達に送る。

*考察：面と向かって悪口を言うより、本人の知らないところでデマを流したり、悪口を言うことが多い。デマなどに惑わされない、強い意志と判断力が必要。
それができるかどうかを大人が見守らないと、ネット上での闇にはまっていくケースの恐ろしさを感じる。「皆にそう思われているのではないか」と自身を追い詰めて悩む生徒もいる。

＜スマホ社会の落とし穴にはまらない子育てを＞

その時間が、スマホに奪われていませんか？

「お母さんに話を聞いてほしいのに、お母さんがいつもスマホを見ているので話しかけられない」「自分が話しても聞いてくれている感じがしない」
逆に、「食事中もずっとスマホばかり見ていて、ろくに口を聞かない」と子どもに手をやいている保護者の声も聞きます。

家族に愛されているという実感が、学童・思春期になって家族以外の多くの人との関係を築いていく基礎になります。家族、地域の中で自分の居場所がある、自分の居場所を見つけることをできることが、その後の人生をさらに豊かなものにしてくれるのです。日本の若者の自殺が増え続けている、自己肯定感の低い子どもたちが世界の先進国の中で最も多いという事実を直視して、今できることをするのが大人の責任だと思います。何が大事かをあらためて考えて、スマホ社会の落とし穴にはまらない子育てを、学校・家庭・地域で心がけていきましょう。

(参考：「スマホ社会の落とし穴」より 共著：清川輝基 内海裕美 少年写真新聞社)